

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書（Web 公開用）

申請者（ふりがな）	堀内 翼（ほりうち つばさ）
所属・資格（※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載）	修士課程 2 年
発表年月 または事業開催年月	2025 年 8 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本認知・行動療法学会第 51 回大会 大阪府大阪市北区中之島 5-3-51 大阪国際会議場
発表者（※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること）	堀内 翼、味方 舞、福留 尚典、嶋田 洋徳
発表題目（※学会発表の場合のみ記載）	重要他者との関係におけるストレスイベントと自尊心が食行動異常に及ぼす影響の記述的検討
発表・活動・開催の概要と成果（学会発表の場合、抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。）	
本研究は、重要他者との関係におけるストレスイベントと自尊心が、食行動異常の 1 種である神経性過食症におよぼす影響性について記述的に検討することを目的とした。神経性過食症に対する心理的介入の 1 つとして、Interpersonal Psychotherapy（以下、IPT）があげられる。IPT は、重要他者との関係について介入を行い、長期的な寛解期間をもたらすことが出来る一方で、基盤となる IPT-ED モデルの実証的な検討がほとんどなされていない。 本研究においては、関東圏の女性を対象として、摂食障害傾向、感情認知の障害、否定的な社会的評価、自尊感情、対人関係満足度、対人関係効力感、過食行動の動機をそれぞれ測定し、統計的手法による比較を行った。IPT-ED モデルに基づいて、摂食障害傾向、感情認知の障害、否定的な社会的評価、自尊感情、対人関係満足度、対人関係効力感の 6 つの観測変数を用いて、構造方程式モデリングによるパスモデルの作成を行ったところ、概ね十分な適合度が得られた。また、過食行動の動機について、Cochran の Q 検定を実施した結果、5 つの動機の回答率に有意な差が認められ、感覚刺激と逃避が、阻止、注目、要求と比較して、それぞれ有意に多かった。 本研究の成果として、否定的な社会的評価によって自尊心が低下し、神経性過食症傾向が強まるといふ、IPT-ED モデルが実証的に支持された。また、重要他者との関係に介入を行うことによって、対人効力感を媒介し、神経性過食症傾向が改善するといった IPT の作用機序に関する仮説が実証的に示された。また、過食行動の動機と IPT-ED モデルを併せて考察すると、過食行動は、対人関係上の問題からの「逃避」という負の強化によって維持される側面と、対人関係上の問題に限らずに過食行動自体における感覚刺激の入力といった正の強化によって維持される側面が存在すると考えられる。 したがって、神経性過食症への介入を行う際には、過食行動の持つ機能のアセスメントを行ったうえで、対人関係上の問題に対する介入を行うことによって、さらに効果的な介入を行うことが出来ると思う。	